

栃尾タイムス

発行
栃尾タイムス社
新潟県長岡市仲子町1-6
TEL 0258 (52) 2334
FAX 0258 (53) 5161
(昭和38年10月31日
第三種郵便物認可)
編集発行人
澁谷 俊 隆

第1854号 平成26年12月15日(月曜日) 2014年 毎月5.15.25日発行

学生による地域活性化プログラム

「とちお祭への裏方参画と調査」 長岡大学・今瀬ゼミが成果発表

長岡大学の長岡地域（創造人材）養成プログラム「学生による地域活性化プログラム」平成26年度成果発表会が12月6日、ホテルニューオータニ長岡NCホールで開かれ、10のゼミが参加。栃尾地域を題材に取り上げた、今瀬政司ゼミ生も「とちお祭への裏方参画と調査・情報発信」と題し発表を行った。

同プログラムは平成25年8月、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」に採択された。同事業は大学が自治体等と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進めて、地域コミュニティの中核的存在（課題解決に資する人材・情報・技術の集積拠点）となり、地域コミュニティの再生・活性化の核となる大学

へと、自ら改革することを支援する事業。対象地域は、平成17年から22年の間に11市町村が合併した長岡地域で、地域課題は①産業活性化（産業の活性化による地域経済の発展）②市民協働による社会課題解決（少子高齢化・環境問題等の社会課題の解決）③地域・コミュニティ活性化（地域社会の喫緊の課題）

開会にあたり、内藤敏樹学長は「学生が地域社会の中に入って課題を見つけ出し、それに対する取り組みを自分の行動を通じて行う、講義というより実践活動に重点を置いていく。我々大学が地域のために役立つこと以上、体験した学生が社会において実践活動

できる人間になることを期待し実践して来ましたが」と挨拶した。今瀬ゼミは「とちお祭への裏方参画と調査・情報発信」長岡・栃尾地域を元気にするために」と題して五十嵐信彦さん、澤井芳秀さん、須田一聖さん相山祐輝さん、太刀川健太郎さんの5人がそれぞれ映像を交えプレゼン。「多くの関係機関と市民協働で活動を行うことに力を入れ取り組んで来ました」と述べ、5つの活動に取り組んだことを発表。

「我々ゼミ生で企画書作成から始め、当初は長岡駅から過疎地をつなぐ」というものを様々な協力機関と相談し貴重な助言やアドバイスを頂き、幾度か変更して現在の企画「とちお祭」に出合いました。祭りは1955年から始まり今年60周年を迎え、2日間で様々なイベントを行い地域を盛り上げています」と報告し、次の3つのイベントを推薦。

一つは「全日本樽みこし綱引き選手権大会」。全国でも珍しい、酒樽を積んだみこしを力強く引き合う大会。二つ目は「仁和賀行進」。参加団体がパフォーマンスを行ない市中を練り歩き、各町内の特色ある出し物を披露。三つ目は「大花火大会」。山の上から上がる美しい花火を見る事が出来る」と花火打上近くで撮影した映像を流した。

とちお祭の準備段階から様々な会に参加。仁和賀行進の部会で「参加団体が減っている。来年もやれるか」という意見を聞き、栃尾過疎化の現実を知った。印象的に感じた祭りの結団式では、多くの関係者が出席。3週間ほど前から会場周辺のPR用の提灯や幟を設置したが、「予算や人数がもつと多かつたら設置場所を広げられると思つた」と感想を語った。

ゼミ生は、栃尾本町区の仁和賀行進の準備会や練習にも参加。その中で、「集まって何かをやるといふことで、同じ地区の人との付き合いが深くなる」と感じ、栃尾本町以外の地域がどれほど活気づいているかが気になったという。

昔のとちお祭の写真を見て、昔のような参加人数には及ばないが、親子連れなど多くの方が訪れ、大民踊流しは30以上の団体が参加して盛り上がりを見せた。また、山の上の花火打ち上げ場所で打ち上げ準備、撮影や合図、約600リットルの水を山の上に向けて防火水槽に入れ、落葉の清掃などを行ない、火災など安全対策に力を入れていると実感。栃尾煙火協会の高見力さんのもと、作業の手際良さが印象に残ったが「後継者への引き継ぎが課題だ」と伺った。そして翌日、燃え殻回収など行なった。



今瀬ゼミ生5人が「とちお祭り」行事の映像を交え発表

「我々ゼミ生で企画書作成から始め、当初は長岡駅から過疎地をつなぐ」というものを様々な協力機関と相談し貴重な助言やアドバイスを頂き、幾度か変更して現在の企画「とちお祭」に出合いました。祭りは1955年から始まり今年60周年を迎え、2日間で様々なイベントを行い地域を盛り上げています」と報告し、次の3つのイベントを推薦。

一つは「全日本樽みこし綱引き選手権大会」。全国でも珍しい、酒樽を積んだみこしを力強く引き合う大会。二つ目は「仁和賀行進」。参加団体がパフォーマンスを行ない市中を練り歩き、各町内の特色ある出し物を披露。三つ目は「大花火大会」。山の上から上がる美しい花火を見る事が出来る」と花火打上近くで撮影した映像を流した。

とちお祭の準備段階から様々な会に参加。仁和賀行進の部会で「参加団体が減っている。来年もやれるか」という意見を聞き、栃尾過疎化の現実を知った。印象的に感じた祭りの結団式では、多くの関係者が出席。3週間ほど前から会場周辺のPR用の提灯や幟を設置したが、「予算や人数がもつと多かつたら設置場所を広げられると思つた」と感想を語った。

ゼミ生は、栃尾本町区の仁和賀行進の準備会や練習にも参加。その中で、「集まって何かをやるといふことで、同じ地区の人との付き合いが深くなる」と感じ、栃尾本町以外の地域がどれほど活気づいているかが気になったという。

昔のとちお祭の写真を見て、昔のような参加人数には及ばないが、親子連れなど多くの方が訪れ、大民踊流しは30以上の団体が参加して盛り上がりを見せた。また、山の上の花火打ち上げ場所で打ち上げ準備、撮影や合図、約600リットルの水を山の上に向けて防火水槽に入れ、落葉の清掃などを行ない、火災など安全対策に力を入れていると実感。栃尾煙火協会の高見力さんのもと、作業の手際良さが印象に残ったが「後継者への引き継ぎが課題だ」と伺った。そして翌日、燃え殻回収など行なった。

とちお祭の準備段階から様々な会に参加。仁和賀行進の部会で「参加団体が減っている。来年もやれるか」という意見を聞き、栃尾過疎化の現実を知った。印象的に感じた祭りの結団式では、多くの関係者が出席。3週間ほど前から会場周辺のPR用の提灯や幟を設置したが、「予算や人数がもつと多かつたら設置場所を広げられると思つた」と感想を語った。

ゼミ生は、栃尾本町区の仁和賀行進の準備会や練習にも参加。その中で、「集まって何かをやるといふことで、同じ地区の人との付き合いが深くなる」と感じ、栃尾本町以外の地域がどれほど活気づいているかが気になったという。

昔のとちお祭の写真を見て、昔のような参加人数には及ばないが、親子連れなど多くの方が訪れ、大民踊流しは30以上の団体が参加して盛り上がりを見せた。また、山の上の花火打ち上げ場所で打ち上げ準備、撮影や合図、約600リットルの水を山の上に向けて防火水槽に入れ、落葉の清掃などを行ない、火災など安全対策に力を入れていると実感。栃尾煙火協会の高見力さんのもと、作業の手際良さが印象に残ったが「後継者への引き継ぎが課題だ」と伺った。そして翌日、燃え殻回収など行なった。

参加。雨の中、ずぶ濡れになって踊ったが、多くの見物客から見てもらった。後日、長岡大学「悠久祭」で、今瀬ゼミと栃尾本町区の合同「仁和賀パフォーマンス」を披露し、本番に負けないイベントになった。

【今瀬ゼミからの提言】
①とちお祭で準備、運営、片付けなど行なう裏方さんが地元で評価されるような仕掛けをし、地元の方にも見られる祭にする。
②樽みこしを栃尾以外の地域の祭に出前開催し「樽みこし綱引き大会」を多くの人に知ってもらう。
③とちお祭の会場で地元名物料理や家庭料理の屋台を多く出すようにし、地域外の来場者の楽しみを増やす。

発表後、アドバイザの栃尾支所商工観光課・荒木隆観光係長は「素晴らしいプレゼンで、10月の時とは別物で感動しました。とちお祭を始めから手伝って頂き、非常に感謝しております。樽みこし選手権大会に出て頂いたり、裏方作業をやった頂いたが、秋葉公園は坂道を登らないと高齢者の方は見に行けないというネックがあり、

続けて荒木観光係長が「道の駅の年間入場者は55万人と多いが、中心部と離れており、とちお祭に上手く外からお客を入れる、という仕掛けを来年提案して頂けますか」と要望すると、ゼミ生は「私達が力になれるか分かりませんが、自分達の出来る事を力の限りやらせて頂きたいと思っております」と応えた。

来年から中央公園の平場に会場を移したいと考えていますが、今年参加して、お客さんが少ない中どう感じられたか」と投げかけると学生たちは「想像していたより親子連れのお客さんがいる印象を受けましたが、これまで何回か会場を移動していると聞いています。やはり高齢者が多くいらっしゃるには、会場を移動することも良いのかと思います」と答えた。